
魔法少女リリカルなのは 無限の英知の一存

正義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 無限の英知の一存

【Nコード】

N0715Z

【作者名】

正義

【あらすじ】

これは時空管理局最高評議会により生み出されたもう1人の異端児『無限の英知』の物語。

『闇の書事件』から五年、『高町なのは撃墜事件』から三年。ユーノ・スクライアはある任務の途上で、特殊な力と能力に目覚める。しかし、そのことがきっかけで管理局の暗部に命を狙われることになってしまう。そんな彼を救ったのは、碧陽帝国永久名誉元師兼帝徒会副会長杉崎鍵だった。

存在しえない記憶（前書き）

やり直し投稿第一弾です

存在しない記憶

—ユーノ視点—

……あれ？ここは何処だろう？

気付いたら、僕は見知らぬ場所に佇んでいた。

周りを見渡す。たくさんの機材や薬品等があるところを見ると、何処かの研究所みたいだけど………明らかにマトモな所じゃない。

まずカプセルの中に入っていたのは、人間だった

それも両足が無かったり頭部が半分以上存在せずに脳みそと思われるものまであった。

ここは、違法研究所か。

暫く内部をさ迷っていると、僕はそこで他よりも一際大きなカプセルの中に佇む男の子とその周りを取り囲んでいる研究者達を発見。

………。

僕はその中の1人、白衣を着た金髪の女性から、目が離せなかった。

……あれ？何だろう、この感覚。ひどく懐かしい気がする。それは長年行方不明だった母親と再会した時のような。

何故こんな感覚を覚えるのか、自分自身でも困惑してしまう中、金髪の女性と研究者達との会話が聞こえてくる。

この子が、新しいプロジェクトA・C・なの？

はい。コードネーム『無限の英知』です。

そう。……名前は？

いえ。まだ決まっていません。

そう。……私が付けてもいいかしら？

？構いませんが。

じゃあ、この子の名は……

金髪の女性は、他の研究者達とは違う慈愛を込めた表情でカプセルの男の子を見つめ、その名を口にした。

×××よ。

存在しえない記憶（後書き）

感想宜しく御願います

第1話「ユーノ・スクライアの覚醒そして失踪」（前書き）

第一話です。デバイスの音声は全て日本語表記とさせてもらいますので、悪しからず。

第1話「ユーノ・スクライアの覚醒そして失踪」

無限大なる次元空間にて一つの歪みが生じた。

歪みはだんだんと肥大化していき、二つの光となると、各々別の方
向へと飛んでいった。

後には変わらぬ次元空間の光景が広がっていた。

—なのは視点—

私、高町なのは。時空管理局武装隊に務める聖祥大附属中学一年の
女の子です。

今回、私は、ユーノ君やヴィータちゃんと一緒にロストロギア回収
のために、ある無人世界を訪れています。

「ここが、例の遺跡？」

「うん。この中からロストロギアの反応が検出されたんだって」

「で、あたしらの任務はそのロストロギアを回収するつつうものだ」
ユーノ君とヴィータちゃんが解説してくれました

私達の眼前には、大きな洞窟が広がっています。

「いつも通りだね。頑張ろう！ユーノ君！ヴィータちゃん！」

「ああ」

「うん」

ヴィータちゃんは素っ気なく、ユーノ君は笑顔で応えてくれました。
でもそのユーノ君の笑顔は、相変わらず“作り笑い”でした。
思わず胸が締め付けられます。

二年前のあの日から、ユーノ君はあまり笑わなくなりました。浮かべるとしても、作り笑いばかり

私としては、ユーノ君には心から笑顔になってほしい。もう一度あの優しい笑顔を見たい。

だから、私はある決意をしました。それは、

「どうしたの？なのは」

「ふえ？」

「いや、僕の顔ジツと見てくるから、何か付いてるのになって」

「え……あ！な、何でもないよ／＼／＼／＼何でも／＼／＼／＼にゃはは」

「そう？ならいいけど」

「おーい！何やってんだ！？そのカップル！置いてくぞ！」

「ヴィ、ヴィータ／＼／＼」

「ヴィータちゃん／＼／＼」

私とユーノ君はお互い赤くなりながら、慌ててヴィータちゃんの追いました。そんな折、私は改めて決意しました。

…この任務が終わったらユーノ君に告白しよう…

って。

しかし、それは叶わない願いだと、もうすぐ私は知ることになるのです。

—クロノ視点—

今日、僕達はロストロギア回収任務のため、ある無人世界を訪れていた。

現在、現場にはなのは、ヴィータ、ユーノに向かってもらっている。

「なのはちゃん達。大丈夫かな？」

「……油断は出来ないなんせ相手はロストロギアだ。何が起ころうとも不思議じゃない」

「だよな……それに三年前のこともあるし……」

「……」

その一言で艦内の空気が一気に重くなった。

三年前、なのはは任務先で未確認兵器に襲われ、重傷を負った。それまでの無茶が祟って魔法を使うことはおろか歩くことさえ出来なかったなのはが現場に復帰出来たのはひとえに、

「……まあ、心配はいらないだろ。なんたって今回はあいつもいることだし」

「私としてはそっちの方が心配なんだけどね」

確かにエイミイの言うとおり、あいつ―ユーノは三年前なのはと入れ替わりに仕事に没頭するようになった。まるで断罪するかのよう

……そ、そりゃ僕はいつも大量の資料請求するけど、いや、だからこそあいつの負担を減らすためになるべく量を減らしたり、他の司書に回りしたりしてるんだ。けど、あいつが全部持つていくんだから仕方ないだろ！……って僕は一体誰に弁解してるんだらう？

「ど、どうしたの？クロノ君」

「いや、何でも無い。それより今はとにかく三人を信じて待つしかない」

「……そうだね」

だが、この時僕達は予想もしていなかった。

……今回の任務で、大切な仲間を1人、失うはめになるなんて……

―ユーノ視点―

洞窟の奥―ロストログアが眠っているとされる場所にまでやってきた僕は、そこで遺跡の守護者と思われる人間の身体に手足が蠍の化け物と対峙することになった。

「おらあああ!!」

ヴィータがグラーファイゼンを蠍の化け物―遺跡の守護者に向かって振り下ろす。しかし、人蠍は後ろに跳躍することで、それを難なくかわした。

「アクセルシューター」

続いて、なのはが誘導弾を放つけど、人蠍は洞窟内を縦横無尽に駆け回ったり、腕の鉗で弾いたりして防いでいた。

「くそっ!すばしっこい奴め!」

ヴィータが毒づく。

実際戦況は僕達にとって不利なものだった。人蠍はその機敏さと頑丈さ、更には僕やなのはの仕掛けた捕縛魔法に気付く程の観察眼を持っていて、中々捕らえることが出来ない。加えてなのはは、こういう狭い場所では、得意の砲撃も封じられてしまっている。

一体どうすれば……ん?待てよ……砲撃……!そうだ!これなら!

(なのは!)

(何?)

(今から僕が合図したらあのロストログアに向かって、思いっきり砲撃をぶっ放してほしいんだ)

(ええ!??でも、そんな事したら)

（大丈夫。僕を信じて）

（ユーノ君……分かった信じるよ！）

（ありがとう、なのは。……ヴィータ！）

（んあ？何だよ？何か良い作品でも思い付いたのか？）

（僕が合図するまで、その人蠍を引きつけといてほしいんだ。出来る？）

（へっ！嘗めんじゃねえよ！んなもん朝飯前だ）

（じゃあ、お願い）

「いくぜ！アイゼン！」

【シュワルベフリーゲン！】

ヴィータが人差し指と中指と薬指の間に鉄球を出現させ、それらを空中に放り投げ、グラーフアイゼンで叩いた。

叩かれた三つの鉄球は、人蠍に向かって飛んでいき、後ろに跳躍されかわされる。そのままヴィータは鉄球を操って人蠍をロストロギアから離すために攻撃を繰り返す。

……まだだ……もうちょっと………！

（今だ！）

人蠍がロストロギアから一定距離離れたのを見て僕は二人に合図を送ったヴィータは鉄球を消して人蠍から離れ、なのはは既にバスターモードに変形させていたレイジングハートの矛先を洞窟内の真ん中にある台座に置かれてる紅い宝石―ロストロギアに向け環状魔法陣を出現させ、内側に魔力を集束させる。

「デイバイイイイインバスタアアアアー！！」

ある程度の大きさとなったところでそれを解放。

桜色の球体は、轟音と共に桜色の光線となって、ロストロギアに向かって一直線に飛んでいった。

「！？」

それに気付いた人蠍は慌ててロストロギアの躍り出てディバインバスターの直撃を受ける。

「捉えて固めろ！封鎖の檻！アレスターチェーン！」

その隙に両掌に発生させた魔法陣から計十二本のバインドが伸びて人蠍に絡み付き捕縛。流石の人蠍もこれは簡単には外せないらしく、ジタバタと暴れている。

「よし！成功だ！」

「やったね！ユーノ君」

「おし！じゃあ、今の内に封印を」と、ヴィータが口にした時だった。

…視界が真っ白い閃光に染まった…

―鍵視点―

「!？」

「どうしたの？キー君」

知弦が話しかけてくるが今はそれどころじゃない

この感覚……間違い無く聖魔の力の波動。でもこれは善樹のじゃないな。いや、待てよ。この感じ………もしかして、“あいつ”か！

「杉崎君！」

善樹から通信が届いた。

「中目黒か。ああ、俺も感じたよ」

「この感じ………やっぱり“彼”かな？」

「多分な」

「ちよつ、ちよつと！鍵も善樹も、二人だけで納得してないで、私達にも説明しなさいよ！」

巡が食って掛かってきた見れば、他の皆も食事の手を止めて、こっちを見ている。

俺は苦笑しながら答える

「ちよつと“旧友”のことを思い出してただけだよ」

「旧友？」

「ああ」

そこで一旦区切って、俺は再び語り始める。

「かれこれ、もう“二十年以上”前になるかな」

――はやて（ヴォルゲンリッター）視点――

「……！？」

（なんや？今の心臓を挟られたような感覚は？）

（まさか！ヴィータちゃんの身に何かあったんじゃない？）

（いや、あいつに限ってそんなことは……無いと信じたいが）

ヴィータ（ちゃん）無事で居てえな（ちよつだいくれ）！

――クロノ視点――

「エイミィ！なのは達との通信は！？」

「ちょっと待つて！……………駄目！やっぱり繋がらない！」

今、僕達が見てる画面は全て砂嵐に覆われてる。

それは数十秒前の出来事だった。この無人世界上空で謎の光が観測されたと思ったら、ユーノ達がロストロギアの封印処理を行おうとした洞窟に落下。画面は全て一瞬の閃光の後に砂嵐と化してしまい、ユーノ達とも音信不通になってしまったというわけだ。

（なのは！ユーノ！ヴィータ！誰でもいい！応答してくれ！）

しかし、返答は来ない。

くそっ、念話も駄目か！

「……………」

一瞬、最悪の光景が脳裏を過ぎるが、頭を振ってそれを振り払う。

三人！無事で居てくれ！

—なのは視点—

「うっああああああああ！！！！？」

「ぐううううううううう！！！！？」

「ユーノ君！？ヴィータちゃん！？二人ともしっかり！」

目を押さえながらうずくまるユーノ君。胸を掴みながらもがき苦しむヴィータちゃん。そして泣き叫ぶ私。

それは一瞬の出来事でした。

目標のロストロギアを封印しようとした矢先、突如天井真つ白な光が降り注ぎ、瞬く間に洞窟内に広がっていきました。

その光に触れた瞬間、目標のロストロギアが消滅したり（そのおか

げで蠍のお化けも消えちゃったけど）私の中から魔力が全部無くな
っていったりユーノ君とヴィータちゃんが苦しむ出したんです
おまけにアースラとの連絡も取れず、私はどうすればいいのか分か
らなくなりました。

「ぐうううううううう！？ぐううう！？」

「うああああ！？ああああああああ！？」

「ユーノ君！？ヴィータちゃん！？」

二人を助けたい。

しかし、魔力の無い私はただの無力な女の子。
ただただ泣き叫ぶことしか出来ません。

どうして？……どうしてなの？私はたくさんの人達を、悲しみ苦し
みから救い出したくて管理局に入ったのに！？
どうして大切な友達や想い人が苦しんでるのに助けてあげられない
の！？

もし、このまま二人が助からなかったら………やだ！やだ！そ
んなのいやだ！誰か、誰か助けて！

そう思った時、変化は訪れました。

「ぐううう！？」

「あ……うあああ……あ？………あああああああ！！
？？」

「ユーノ君！」

突然ユーノ君が立ち上がって、天井に向かって雄叫びを上げ始めま
した。

それと共にユーノ君の体が黄緑色の光に輝き出し髪の毛は銀色に瞳
の色は真っ赤に染まり出しました。

「ああああああああ！！！！？？はあ、はあ、な、なの、は？」

「ユーノ君……っ！？」

「なのは？……っ！？」

咄嗟に駆け寄ろうとした足がピタツと止まりました何故ならユーノ君の瞳を見てしまったからです。

彼の瞳は私の知る翡翠色では真っ赤に染まっていて、しかもその中に金色で図形が書かれてあったのです。

その瞳を見た瞬間、私は何故か自身の全てを見透かされている気がして、足が竦んでしまったのです。

「なのは……」

「ユーノ君……その目……」

「目？」

どうやら彼は自分の状態に気付いてないようです

私が持参していた手鏡をユーノ君に手渡すと、彼はそれで自分の顔を見て驚いた後、酷く顔をしかめました。

「ええ！？こ、これが、僕？………」

「ど、どうしたの？ユーノ君」

「……え？あ、いや、な何でもないよ。それより何があったのか教えてくれないかな？」

「う、うん。実はね」

一瞬、またユーノ君が作り笑いを浮かべて胸が痛くなりましたが、すぐに気を取り直しユーノ君に事のあらましを全て話しました。

「……そっか。そんなことが」

「うん」

「ぐうううううううう！！？？」

「ヴィータちゃん！」

「まずいね。ヴィータの中からリンカーコアが消滅してしまった。このままだと遠からずヴィータは死んでしまう」

「そんな！？」

私が涙を流すと、ユーノ君は真剣な表情でそれを指で掬い取ってくれます

「大丈夫。僕が何とかする。だから泣かないで」

「ふえ？」

ユーノ君はそう言って少し離れると、目を閉じます。すると、ユーノ君の体が真っ白に輝き出し、その光はやがて黄緑色から緑色になってユーノ君の体の外へ放たれました洞窟内が緑色の光で満たされてます。

続いてユーノ君はヴィータちゃんの傍まで近寄ると、しゃがんで両掌を重ねてヴィータちゃんの胸の上に翳すと、見たこともない魔法陣を発生させると呪文を唱え出しました。

「我、汝に魔の業の力を与えん。リンカークリエーション」

「ぐうううううううう！？……………うう、う、すう、すう」

ヴィータちゃんの体が紅く輝き出し、胸に小さな光が出来る、徐々に呼吸が落ち着いてきました

「ヴィータちゃん！」

「うん。これで大丈夫。あとはシャマルに見てもらえればすぐに良くなると思うから」

「ううう、良かった……良かったよ……………」

嬉しくて涙が止まりません。しかし、その涙は次にユーノ君が発した言葉でピタリと止まりました。

「レイジングハート」

【了解。ユーノ様】

「ひつく……………え？」

振り返って見ると、そこには魔法陣を展開しているユーノ君とレイジングハートが浮かんでました

「ユーノ、君？」

訳が分からず呆然と呟くと、ユーノ君はまたあの作り笑いを浮かべ言ってきました。

「ごめんね、なのは。」

「え？」

その言葉と同時に魔法陣が一層輝き出しました。

「ユーノ君！」

行かせてはならない！今行かせたら、もう二度と会えなくなる！そう直感した私は急いでユーノ君に駆け寄ろうとします。

「さようなら」

「待つて！ユーノ君！お願い！ユーノく」

しかし、私の叫びも虚しくユーノ君とレイジングハートはその場から消えていきました。

「あう！」

勢い余って転んでしまった私は、そのまま涙を流しながら、今はこの場にはいない彼の名を叫びました。

「えっぐ、ユーノくううううんんんん！！！！！！？」

…しかし、私の叫びが彼に届くことはありませんでした…

第1話「ユーノ・スクライアの覚醒そして失踪」（後書き）

今回の話で登場した作者オリジナルの魔法の解説

リンカークリエーション

対象の体内にリンカーコアを形成、または何らかの理由で消滅したリンカーコアを完全再生させることが出来る。

つまり一般人を魔導師に変えることが出来る魔法

普通なら形成したリンカーコアを体に慣らすのに数週間掛かるがヴィータは元々魔法で造られた疑似生命体なのですぐに安定させることが出来た。

ユーノ即席の魔法。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0715z/>

魔法少女リリカルなのは 無限の英知の一存

2012年1月4日12時50分発行